

最も古い思い出

何才くらいから覚えている？

1. 記憶の中で最も古いもの
2. 頭を切られた
3. 幼稚園のカバン(6~7才)
4. 幼稚園の記憶(6~7才)
5. 大勝館に芝居を見に行った(7才)
6. 日の丸荘でいちごをとって食べた(7才)
7. 最初の友達(7才)
8. くず鉄拾い(8~9才)
9. 給食とバター
10. 峯さん、明ちゃん、章雄ちゃん、靖夫ちゃんと遊ぶ
11. 熱の湯で溺れた
12. 六勝園に泳ぎに行った
13. 水泳大会ビリだった
14. 川で泳いだ
15. 野山で草や樹の実をとって食べた
16. 浅井かっちゃんとケンカした
17. ムクの実をとりにいって死ぬ思いをした
18. ユウドウの山でチャンバラをして遊んだ
19. ギッチョバの肝だめし
20. 梅屋の箱庭
21. 関節炎
22. 毎朝、林田商店に、みそを買いに行った
23. 夜フスマの間から花札を見ていた
24. 岩から落ちて前歯を折った
25. おばあさん、おじいさん
26. 姉さんがお好み焼きを焼いてくれた

2018.06.27

追加 2019.08.01

1. 里山に鳥用のワナを仕掛けた
2. 好きな食べ物、きれいな食べ物
3. 毎朝、金光教の教会に連れて行かれた
4. 共同浴場
5. 母の食料買い出し

6. 石けり(?)で遊んだ
7. 遊び道具は子供自らが作った
8. 自転車の練習
9. 川をせき止め魚をとった
10. 大分交通、亀の井バス 木炭車の頃
11. 温泉祭りの太鼓の練習

最も古い思い出

人は何歳くらいの記憶を呼び起こすことができるのか？ 人によってそれぞれであろう。小学校低学年のころのことは殆ど覚えていないという人もいる。また、つい10～15年前、現役（会社）時代のことは思い出したくないという人もいるかもしれない。

私には過去を大事にする（良くない）癖がある。10年ほど前、50項目にわたり72ページの自分史「65才を迎えて」を整理・記述した。それをやっていくうちに「自分にとって一番古い記憶とはなんだろう？」と考えた。もちろん1～2才、母乳を飲んでいた頃のことは覚えていない。3～4才ころ自分の住んでいた家の間取りを覚えている？ いらない？やはり4～5才ころから記憶があるのではないだろうか、それもうすらうすらであり、夢かうつつか、その境もさだかでない。そんなことを思い巡らす内に、最も幼いときの思い出といえるものを書き出して古い順に並べてみた。

1. 記憶の中で最も古いもの

家の中で一人で泣き、家族を捜しまわった（3才？）別府市鉄輪の借家（旅館「新屋」3階建ての1階、3部屋あった真ん中の部屋）で夜中に目が覚めた。周りを見ても誰もいない、泣きながら起きて部屋を探し、土間に降りて・・・家中探し回った。家の中は自分一人、怖くて大声も出せなかったように思う。10～15分くらい経ただろうか姉2人と母が帰ってきて安心した。近くの風呂（熱の湯）に行っていたとのこと。時刻で言うと9時から10時頃だったのだろう。このことと、この部屋の間取りや、トイレの場所などを覚えている。炊事場がなかったのは、15メートル先に別にもう一つ借家があり、そちらが母屋だった（？）のだろう。戦後ここを一時的に借りていたと思う。3才上の姉はここで生まれていないとのこと、自分が3才までの記憶といって良いだろう。

この部屋に後から入った住人のことも、その隣に入った人のことも少し覚えている。

2. 頭を切られた

終戦後母が借りていた野菜畑が鉄輪東にあった。姉とよく遊びに行った。当時ものが不足していて、子供たちが着る服はやぶれをふせたものや兄姉のおさがりをまとめることは普通のことであった。そんな事情を知っているわけでもない、畑で遊んでいるとき、近くの竹屋のとこまで行った。そこで1才上の男の子山本君がいた。彼が姉のお下がりの服を着ていたので私が「女の服を着ておかしいな」とひやかした。それが原因でつかみ合いの喧嘩になり、しまいには彼が竹屋から分厚い竹切り包丁を持ってきて私に切りつけた。右目上の頭に5～6cm、深さ1～2cmくらいの傷を負った。当然鮮血が顔中に流れた。そばに居た和子姉さんが20メートル上の畑に母を呼びに行った。駆けつけた母は私を抱えて200メートルはあろう坂上の渡邊病院に運び込んだ。一命はとりとめた。もう少し深かったら大変なことになっていた。今考えてみてもぞっとする。この後のこと、病院での手当のことなどはほとんど覚えていない。何時治ったのかも。小学校入学時の集合写真はじめ、幼い頃の写真に傷痕（ハゲ）がしばらく残っていた。

3. 幼稚園のカバン(6~7才)

6~7才になり別府市立朝日幼稚園に入園した。新しい服やカバン、クレヨン、靴などを準備してくれた。その中でも一番印象に残っているのがカバンである。カバンと言っても重いものを入れるわけでもない、肩からかける手提げみたいなものだ。それがとても嬉しかった。親が用意してくれたものは少し上品に見えるもので色はグレイで毛がふやふやしたビロード(?)風のものだった。大事に使ったものの上品すぎてなのか、強さに難があった。しばらくして手提げのフタをするボタンの穴が破れ、しまらなくなってしまった。フタをしないまま使ったり、ヒモでくりつけたりして使った。なんとか卒園まで使った。他の友達がどんなカバンを使っていたか覚えていない。このことが何故か強く印象に残っている。

4. 幼稚園の記憶(6~7才)

鉄輪井田の家から南へ歩いて1kmくらいのところに別府市立朝日幼稚園がある。正門が東向きにあり、小さい道をはさんで墓所があった。墓所の中を通ることもあったし、大通りを通るのが普通のコース、集団で通っていたか否か記憶にない。門を入れてすぐに園庭があり、砂場、ブランコ、シーソーがあった。あと鉄棒があったくらいでジャングルジムなどはなかった。南側の階段を降りると小学校の運動場に通じた。校舎は正門を入れて突き当たり、教室は3つあり北側からさくら組、もも組、うめ組であった。私はさくら組で先生は色白でふっくらした松井先生。もも組は中村先生、うめ組は加藤先生だった。いずれも女の先生。教室でかすかに思い出されるのは自分たちが描いた、たくさん絵や貼り絵が飾られていたように思う。

1年間お絵かきや遊戯のさまなどは思い出すことが出来ない。でも自分は積極的でおっちょこちょいで活発だったことは想像できる。卒園の茶話会が朝日小学校の一番北西の2階の教室であったのを覚えている。おすし(ばらずし)が出て、少し食べたが気分が悪くなり隣の教室でしばらく休んでいたことや小学校の正門玄関で太田初衛門園長も入った記念写真を撮った事が記憶にある。

5. 大勝館に芝居を見に行った(7才)

別府市鉄輪は温泉地であるので、湯治客の娯楽の一つに芝居がある。いろいろの一座が巡り回ってきて、殆ど毎日やっていたように思う。鉄輪に住む人たちがたまに夜ゆっくりしたときに芝居を見に行くことがあった。少し高台のところ、「亀の井バス」鉄輪終点の東500メートルくらいのところに大勝館(芝居小屋)があった。親に連れられて行った。たまに子供たちだけで行くこともあったような気がする。あるとき自分よりだいぶ小さな子供も見に来ていて、その子が床にへばりついているチューイングガム、時間が経っているのでホコリ・ゴミがついて黒くなっている。これをしきりに、床に口を付けてかじりついて食べていた。当時は食べるものがなくて何でも食べていた時代だが、衛生観念なんてほとんどない。3~4才位の子供だったようだ。あまりきちゃないので何回も注意はしたがやめようとしな。幕が開き次の芝居が始まったのでその後のことは不確かだが、その子は、結局それをかみ続けたと思う。貧しい時代の一コマである。

6. 日の丸荘でいちごをとって食べた(7才)

鉄輪北部、亀川との境に「日の丸荘」と呼んでいた小高い山がある。朝日小学校、亀川小学校での遠足に愛用された場所である。また、この地区の男の子にとってはチャンバラや里山探検、鳥や木の実採取の絶好の地だった。今ではイトーピアが開発したニュータウン大観山町となっている。終戦後このあたりの林が開墾され多くの畑が出現、住民の食料供給の貴重な場所でもあった。あるとき和子姉さんとその友達3～4人でいちごを取りに行った。思ったよりたくさんあり、水で洗って食べ、あまりを姉さんのスカートに包み持って帰ったことを覚えている。いちごドロボーしたことになる。そういえば男友達同士で柿、無花果、びわなどをここに取りに来たこともある。さすがに西瓜は貴重品であり、とって食べるには気が引ける状況だった。

7. 最初の友達(7才)

自分にとって最初の友達は誰だろう、記憶の中では家が隣同士の同じ年の佐藤友秀さんだろう。「ともひでちゃん」とよんでいた。友秀ちゃんの兄さんとも一緒に遊んだ。これは自分史の中でも記述した。朝鮮戦争の話をしてくれた。友秀ちゃんとは小学校1～2年の時は同じ校区には居なくて」どこか転校していった。ただ彼の親戚の家や、同じ年齢の中島こうちゃんの家でクリスマスの時に遊びに行った事も思い出される。それは70才を過ぎた今でも、どういふわけなのか友秀ちゃんのクリスマスカーが自分の手元にあるからだ。中島こうちゃんの家は豪邸できれいな庭はあるし、当時としては珍しくピアノがあり、外人さんが出入りしていて普通の友達とは違った上品なこどもであった。中島こうちゃんも小学2年くらいで東京の方(?)に転校していったようだ。こうちゃんの家は「ひょうたん湯」の近くに行く手前で渡邊病院の斜め前であった

8. くず鉄拾い(8～9才)

小学校1～2年生のころ、子供たちは何を履いていたのか？ 一番多いのは下駄だったように思う。たしか学校に行くにも下駄で行った。学校の下駄箱に入れ教室では当然素足だった。しばらくしてゴム靴が子供の履き物の主流となった。当時ゴムを使用した品物はほとんどなく珍しかった。とてもクッションがよく、履き心地が良かった。ただ、暑くなると柔らかくなり表と裏がひっくり返ったり、中が臭くなったり欠点もあった。このころ学校の行き帰り、そして家に帰ってから道路に地面を見ながら歩いていた。くず鉄を拾うためである。考えてみると戦争当時は金属類が不足していて、寺の鐘や、トタン屋根、農機具の機械なども抛出させられたと聞いている。毎日毎日、鉄くずを求めて歩くと少しずつだが金属類を結構集めることが出来た。種類多い順に、釘・水道工事用鉛、銅線、はり金など1ヶ月ほど集めると相当な量になる。それを鉄くず屋に売りに行った。月に10～20円くらいにはなっていたと思う。

9. 給食とバター

小学校2～3年は昭和27～28年頃、食糧事情が良くなかったのだろう。給食が始まったのは良いが、固いコッペパンに脱脂粉乳をお湯で溶かしたまじりミルクが定番。食欲が進んだという記憶はない。食べきれないので残すことになる。もったいないのでカバンに入れ下校に途中で遊んだ後おやつとして食べる。さらに固くなった、パサパサのパンを食べていた。給食が始まって1年ほどしてから給食にバターが支給されるようになった。滋養補給のためであろう。そう言えばその頃肝油も給食後に食べたり、配給で家に持って帰ることもあった。給食のバターは1本1ヶ月なので定規で測るように毎日3mm以内になるように心がけていた。バターの保存は教室の一番前のところに共通の保存ケースが置いてあり。クラス全員が各自のバターの箱に名前を書いて入れていた。それと給食の思い出として、子供たちは毎日、食材を各自持参して給食室に納めた。大根、なすび、きゅうり、かぼちゃ、ねぎ、トウモロコシ・・・何でも良い、家にあるものを持ち寄った。兄弟がいる家は当然もちよる食材の量は2倍となる。家に野菜類がない家庭は燃料用の薪を抱えて登校した。

10. 峯さん、明ちゃん、章雄ちゃん、靖夫ちゃんと遊ぶ

小学校低学年でいつも一緒に遊んだり、さそいあって登校した友達4・5人組だ。遊んだ場所は靖夫ちゃんとの畑とその付近が多かった。そこにはサトウキビが栽培されており、時々それをもって食べていた。終戦後甘い物が少なかった時代、ありがたかった。それと靖夫ちゃんとの庭には沢山のグミがなり梅雨時にいっぱい赤くなりそれもふんだんに食べた。章雄ちゃんそこには大きなびわの木があったが実がなっていたのか？食べた記憶がない。何をして遊んでいたか？やはり川に魚を捕りに行ったり泳ぎに行ったり、山にムクノキ（実）を取りに行ったり、チャンバラをしたり、石蹴り、缶蹴りなどいろんなあそびをした。明きちゃんの家は最初うかり荘の上の細い階段を上っていったところ、最上部の小さな家であった。遊びに行くにも子供ながら疲れるような急坂の上にあった。その次は勝山館の2階に移った。遊びに行き明きちゃんを呼び出すのに下の庭から「あきちゃん・・・あそぼうや！」と大きな声で2回も3回も呼んでいた。近所でもよく聞こえていたことだろう。

11. 熱の湯で溺れた

何歳くらいから泳ぐようになったのか？記憶にない。ただ4～5才のころ母親についていった共同洗濯場（鉄輪井田）のすすぎ槽、深さ40cmくらいのところで時々泳いでいた。洗濯の待ち時間に。何回も行くうちに泳げるようになったと思ひ込み、場所を変え洗濯場のすぐ上の「熱の湯」で泳ぐことにした。この熱の湯は普段は、湯治客や地元の人が常時入浴で利用するところだが、午前中だったので誰も入っていなかった。これさいわい自分たちだけだった。風呂の中に飛び込んだのは良いが今までと違ってとても深いところで、溺れてしまった。沈むことはなかったが、湯船にたどりつくのにだいぶ水（湯）をのんで、やっとの思いでたどりついた。こんなはずでない、泳ぎの自信が一挙になくなったことを覚えている。そばに友達が3人ほどいたが挑戦したのは自分だけだった。

12. 六勝園に泳ぎに行った

小学校低学年の時、近所の兄貴分、安波広ちゃんや、東（あずま）カズちゃんに野球、将棋、水泳・・・いろいろ遊んでもらった。夏休み3才上の広ちゃんとその友達3～4人について行き鉄輪から歩いて30分くらい別府湾・六勝園の海岸に泳ぎに連れて行ってもらった。この海岸は海水浴場ではないが、岩場や砂地、堤防など変化のあるところで魚とり、カニとり、貝拾い、水泳など結構多くの人に来ていた。広ちゃんたちは沖の方で泳いだり、ヤスで魚を捕ったり自由に遊んでいた。私の面倒はほったらかしで・・・、私は泳がないし、皆について行けないので一人で波打ち際の岩の下の魚やカニ、ニイナなどをとったり、浅瀬で泳いだり、結構な時間遊び回っていた。2～3時間あそんでからまた一緒に歩いて30ほどの鉄輪まで帰った。そんなことで年長者のあそびを覚えた。

当時の親たちに感心させられるのは、小学生だけで泳ぎに行かせる、それを黙認する無頓着さ（?）、しかも低学年の子を連れて行くなんて今では考えられない。よく許可したものだと思う。昔はこのように放任主義、悠長な時代だったのだ。

13. 水泳大会ビリだった

夏休みが終わると毎年水泳大会が開催される。学年ごとに25メートル競泳である。最初に出場したのは小学校3年生の時である。成績は6人中6位、ビリだった。それは3年生の出場者がなく4年生に混じってのことだった。最初から3年生が一人もいないことはわかっていた。でも出場したのは、近所の山住先生から「出場したら褒美、欲しいものを買ってあげる」と言われたからだ。当時欲しいものと言えば、明治キャラメルの箱についた絵がほしくて（キャラメルを食べることでなく）、先生とカケをしたみたいなものだ。この絵を集めるのが好きで、よく鉄輪の街を歩き回っていた。でも多く集まったのは道でなく、旅館のゴミ箱だった。別府には特に春と秋になると沢山の小中学校が修学旅行で来る。生徒が捨てたキャラメルの箱が旅館の焼却炉のそばにあった。

14. 川で泳いだ

子供の頃夏休みで泳ぎに行く場所が一番多いのは学校のプールだった。次が海・六勝園そして3番目が春木川である。朝日小学校の校庭の南側に25mのプールがあり、3～6年生のころ歩いて30分よく通った。このプールは春木川のすぐ横にあり、導水路を通じて川の水を取り込んでいる。当時は田んぼに農薬を使うことが少なかったのであろう、近くを流れる川の水をプールに利用していた。海での泳ぎは別記しているが、行った回数は少ないがこの春木川でも時々泳いだ。場所は小学校よりずっと下流で大分交通のバス道路でいうと新別府の停留所あたり。砂防堰堤が何カ所あり、そこに小学生が泳ぐのに絶好の水たまりがあった。堰堤の上から飛び込んだり、もぐって川魚をとったり、プールとは違った面白さがあった。ここで印象的なことで何故かこの堰堤付近で「ネコイラズ」や「カーバイト」が放置しているのを見つけたことがある。誰が何のために利用したのか今

15. 野山で草や樹の実をとって食べた

小学校3～4年生の頃、育ちざかり、昭和で言うと27～28年頃となる。終戦後そんなに経っていない時期で、食べ物が少なかった。殆どの子供達は先輩から教えてもらった樹や草の実など身の回りにある自然の食べ物をむさぼるように食べた。山や野原、川などにみんなで行ったり、一人で行ったり、とても活動的でたくましかった。当時食べたものを列挙すると。

(木の実) ムク、エノミ、アケビ、グミ(ナワシロ、ナツ、アキ)、カヤの実、ニッケ、ヤマモモ、クワの実
イヌビワ、ビワ、イチジク、カキ、シイ、クリ、バラノミ、サトウキビ、・・・

(草、草の実) ギシギシ、イタドリ、ツバナ(チガヤ)、イチゴ、ワラビ、タラノメ、ノイチゴ

(野菜) ダイコン、ナス、トマト、トイモ(サツマイモ)、トウモロコシ、ヤマイモ、レンコン

そして、これに加えて鳥や虫、動物などの類も積極的に捕まえて食べた。

(動物) ハチ、スズメ、アリ、ヒヨドリ、ウサギ、ヘビ、

(川や海) ドンコ、ウナギ、エビ、カニ、ニイナ、サザエ、アナゴ、タコ

等は貴重なタンパク源であった。レンコンだけは苦い思い出がある。そのまま食べられないので家に持って帰って地獄で蒸して食べようとしたが「ビックリ！」 真っ黒くなって食べる気にならなかった。

16. 浅井かっちゃんとケンカした

子供の頃はよくケンカをした。負けた記憶は少ない、どちらかといえば強い方だった。小学校1年生ではC組の番長だったくらいだ。ちなみにA組は永野喜実ちゃんがそしてB組は毛利恒ちゃんが番長をはっていた。大きくなるにつれてこれも少しずつ変わっていったが。そんななか、2～3年生の頃、近所の1級下の浅井勝ちゃんとケンカをした。彼は1級下ではダントツで強かっただけあってすばしこい強敵であった。1～2回ほどケンカになったことがある。子供のケンカには勝負がつくものだが、その時は勝負がつかず、わたしが自分の家まで逃げて帰った。それは1対1のケンカでなく相手は5人ほどいて集団でかかってくるからだ。玄関先でハアハア息を弾ませながら私の家をとりに来て・・・興奮状態である。母が出て来て「ケンカするなら1対1でなさい」と怒られ、彼らはしぶしぶ退散していったことがあった。同級生で彼ら(1級下の集団)にやられた友人も何人かいた。

17. ムクの実をとりに行って死ぬ思いをした

小さい頃は、無鉄砲なことをして、ちょっと間違えば今の自分があるかどうか・・・?、そんな危険な経験が何度かある。先にも書いたが、1級上の山本君から「竹切り包丁できられた」こと、を筆頭にいくつかのことがある。列挙すると

- (1) 竹切り包丁で頭を切られた
- (2) 図クの実を一人でとりに行って、高い木の枝までのぼり落ちたこと
- (3) 渡るかどうか不確実な川を飛び越え、向こう側の土手で胸を強打して息ができなかったこと

- (4) 音楽教室の帰りに廊下を走り滑って踏み外し角で頭をぶっつけ、大きな見たこともないようなタンコブができた。
少しでも打ち所が悪ければ・・・ぞっとする
- (5) 泳げないのに自分ひとり海岸で遊んだり、魚捕りに夢中になっていたこと（7～8才頃）
- (6) 小さい頃の関節炎 別記 (6) 小さい頃の関節炎 別記

18. ユウドウの山でチャンバラをして遊んだ

小学校4～5年頃よく「ユウドウ」の山で遊んだ。その後、昭和35～36年に建った貴船城がある山だ。鉄輪の東、亀川の西南にあたる。「ユウドウ」ってどんな意味があるのか？ 漢字？ わからない。正式な地名は今でもわからない。当時遊ぶと言えばチャンバラは男の子にとって夢中にさせるものだった。山や坂道、林の中での太刀あいは実際味があって面白かった、飽きなかった。そこへ行くために家を出るとき、たいてい、「さつまいも」を持参し、チャンバラ開始前にユウドウの地面を30cmほど掘って、その中に入れておく。草と土をかぶせて、チャンバラが終わって、掘り上げると「ふかしいも」ができあがっている、とてもおいしい。鉄輪は街中、地獄地帯、地熱でこんなことが出来る。いまでもこの山に行けばこんなことが出来るのか？ やってみたい！

19. ギッチョバの肝だめし

鉄輪の青年団の集まりでは、夏の寄り合いの後、お酒が入っていい気分になり、夜も更けてくると誰からともなく「ポチポチ始めるか・・・」と言って恒例の肝だめしが始まるらしい。この時代、鉄輪に限らずどこの町や村でもよく行われた若い人の遊びであったのだろう。一人ずつ順番に墓所に行きそこに置いている（例えば）タオルを持って帰る。次の人はそのタオルを同じ（所定の）場所に置いて帰る。選ばれる場所は真っ暗な林道を通して薄気味悪い墓地だ。この頃私自身はその年齢に達していなかったのだからこれはしたことはないが、この話を年長者からよく聞かされた。よく覚えている。当時は今のような高品質の懐中電灯があったわけでもなく、竹筒に入れたローソクや提灯などの明かりをたよりに・・・素朴な遊びである。「ギッチョバ」とは、どういう意味なのか？ 場所は確か「うかり荘」の上1～2kmさきの墓地一帯をさすのだ。

20. 梅屋の箱庭

鉄輪の家から5～6軒下（東）に「梅屋」がある。旅館みたいな貸間である。そこのお兄さんが毎年七夕の時期になると必ず、自分の家の前にミニチュア版の庭園を造る。川もあれば池、橋、島松、竹林、田んぼ、農夫、牛・・・種々のグッズを巧みに配置し、みごとな出来ばえである。感心する。道行く人々は時間をかけて鑑賞する。私たち子供も誘い合ってそれを見物に行く。夕方19:00～21:00くらいの間だったと思う。子供ながらに風情を感じるし、昔ながらの生活、行事、歴史、伝統などを味わうことが出来た。これも幼稚園から小学校低学年ころの思い出である。

21. 関節炎

私は幼い0～1才くらいの頃、関節炎にかかったという。痛くて毎晩泣いていた3～4日続いたとのこと、医者に診てもらっても原因がわからず困り果て、両親も“さじを投げた”ような状態であつたらしい。そのうち足を動かした時に、より大きな声で、激しく泣くので・・・よく調べたところ関節炎を発症しているということだった。急いで手術したという。今でも左足にその傷痕が残っているが、かなり症状がひどく普通に歩けるようはならないだろうと言われたらしい。それが原因しているのか？今でも時々友達から「足が悪いの?」、「ビッコひいてる?」時々聞かれることがある。

22. 毎朝、林田商店に、みそを買いに行った

幼い頃、家の手伝いを出来ることは少ない。小学校2～3年生頃、毎朝7:00頃 2軒先の林田商店にみそ（味噌汁用）を買いに行った。ドンブリ鉢と20円を持って・・・、店にはいる前から「ごめんください、みそ下さい!」と大きな声を出して。林田商店だけでなく、向かいの松屋旅館、ますや（貸間）の人たちにも聞こえるくらいの声で。いつものことなので近所でも有名だったようだ。当時めかた（重量）の単位は尺貫法で、20円だと100匁くらい買えたようだ。すこし時間が建って姉が中学校に行くようになってからは、みそに加えて「てんぷら」（今で言う「ヒラテン」：弁当のおかず）も併せて買うようになった。クジラの角煮や卵などは上等品であったため、めったに買えなかった、買った記憶がない。手伝いの一つに時々メリケン粉を持って行きうどん屋で「うどん」をうってもらっていた。うどん屋には、モータや幅の広いベルト付のうどん機械があった。風呂本「かつきや」の近くにあった。うどんが出来るまでそこのおばさんが、鉄輪の話をよくしてくれた。中学野球部の先輩のお母さんだった。

23. 夜フスマの間から花札を見ていた

よく家族で花札のゲームで遊んでいた。とても好きだった。時々お父さんが夕食後、友達を家に誘って2人で花札をしていた。いづらか賭けていたのだろう、マッチ棒を何本か横に置き追加したりしていた。私は横で見ているだけだった。それでも好きだった。夜8時を過ぎ子供の寝る時間になると隣の部屋に追いやられた。寝なさいというわけである。しかたなくしぶしぶ布団の中に入るもののまだその花札を見たくて、隣の部屋からふすまを少し開けてそれを見ていた。自分がしているのでないのに・・・見るだけでも面白かったのだろう、それくらい好きだったことになる。そういえば父さんとは時々将棋もしていた。小学校低学年では負けていたが、高学年になると徐々に勝つようになった。近所の広ちゃんやカズちゃんから鍛えてもらったからだと思う。

24. 岩から落ちて前歯を折った

家の横が空き地、広場になっていた。子供達が集まって遊んだり、年2回など子供相撲大会などもあった。途中で大きな旅館が建ったが、それまでは盆踊りが催されたこともあったし、夜店などが出たこともあった。その広場に大きな石が積んでいるところがあり、そこで遊んでいて小学校5年生？のころ、てっぺんから足を踏み外して下に落ちたことがある。さいわい頭を打ったり、骨を折ったりはしなかったが顔面をすこし石で打った。この時前歯がかけた、動く歯もでてきた。この頃は、既に永久歯に生え替わっていたのだろう欠けた歯は元に戻らず、歯の具合も悪くなり、それ以来歯医者通いが常となるようになった。それまでは歯の健康優良児になったこともあったのに・・・年齢を重ね、ますます虫歯、かぶせ、入歯などはげしくなり、歯に悩まされるようになった。特に困ったのは単身赴任の時に悪くなると始末が悪い、東京時代や海外（バーレーン）の時に歯がとれた時には参った。行きつけの歯医者もなく、かってもわからないところで・・・難儀！ 今も歯はガタガタである。

25. おばあさん、おじいさん

平均寿命が延びて、日本は世界でも1, 2位を争う長寿国となっている。自分が子供の頃、長く続いた戦争の時代と重なり、男は兵役に、そして、ものは不足し、衛生・健康状態も劣悪で高齢まで生きる割合が少なかった。私の場合も、おばあさん2人は覚えているが、おじいさんのことは2人とも知らない。気がついたときには既に亡くなっていた。仏壇や母屋のカモイに掲示された写真を見かけるのみだった。羽室のおばあさんは時々鉄輪に遊びに来てくれていた。楽しみだった。小柄でやさしかった。あるとき「うかり荘」の坂の上で動けなくなり、和子姉さんと2人ではどうにもならなくて、母を呼びに走って家まで帰った事があった。おんぶして連れて帰った。下（東）のおばあさん（父方）にかわいがってもらった記憶はほとんどない。なにか嫁・しゅうとめの関係等原因があったのだろうか？ でも母が、母屋の農繁期、田植えや、稲刈りの都度、手伝いに行き、子供ら（姉、自分）もついて行き、いとこ達と空き地で遊んだり、大勢でご飯を食べたり、したことは多々あった。別におばあさんを意識することはなかった。

26. 姉さんがお好み焼きを焼いてくれた

上の姉さんと私は7つ違いなので一緒に遊んだという記憶はない。3つ上の姉さんとは年が近いので時々遊んだ。ただ上の姉さんは母さんが居ないときに、よくお好み焼きを作って、2人に食べさせてくれた。出来上がりを待っている姿を今でも思い出すことが出来る。料理はこれくらいしか出来なかったのかもしれない。次に記憶しているのは、新しい10円硬貨をもらったことだ、姉が鉄輪の「おこしや」や、別府の商店「大島屋」で働いていたとき給料日には何か買ってきてくれていた。昭和25年くらいだったと思う。10円硬貨がはじめて発行されたのは、まさらの硬貨をもらって嬉しかったことを覚えている。またあるときは野球のグローブを買ってもらったことがあった。買ってもらったのが小学校時代で中学校の時まで使っていた。

1. 里山に鳥用のワナを仕掛けた
2. 好きな食べ物、きれいな食べ物
3. 毎朝、金光教会に連れて行かれた
4. 共同浴場
5. 母の食料買い出し
6. 石けり(?)で遊んだ
7. 遊び道具は子供自らが作った
8. 自転車の練習
9. 川をせき止め魚をとった
10. 大分交通、亀の井バス 木炭車
11. 温泉祭りの太鼓の練習
12. 六勝園に泳ぎに行った
13. 水泳大会ビリだった
14. 水泳大会ビリだった

1. 里山に鳥用のワナを仕掛けた

動物たちは春～秋にかけては野・山・畑・川でみずから好みの果実や虫など存分に食べたい物を得ることが出来る。しかし冬が訪れると虫や小動物は冬眠のため土の中に潜り込み長期間地上には出てこない。また積雪のため草や木の実は姿は見えなくなる。

小学校2～3年の頃、この季節になると近くの里山へ行き鳥を捕るために“ワナ”を仕掛ける。1つの山に5～10コを作る。1～2日おきに獲物がかかっているか否か見に行く。ワナの構造は簡単に言えば木の弾力性(ばね)を利用して鳥を締め付ける、駕籠の中に閉じ込めるという方式だ。子供の腕の半分くらいの太さの木を(根をそのままにして)1mくらいの高さで切る。その木の先端に紐をつけ、木を曲げる。地面には竹を切って突き刺したカゴ状の物を作り、その中に鳥が好きそうなナンテンの実、はぜの実、センダンの実などを入れておく。鳥が近づいてその上に載ると仕掛けが外れて鳥は足や首をはさまれて動けなくなる。獲物はヒヨドリが多かったが、たまにキジ、ヤマウサギ、ヘビ等が掛かることもある。子供たち2～3人で探検に見回り行くのが楽しく、ワクワクする思いだった。

2. 好きな食べ物、きれいな食べ物

小さい頃、育ち盛りの頃には物が不足、不自由していた。当時何を食べていただろう。沢山思い出すことが出来ない。今の時代であれば数え切れないくらい豊富なのに。いまでも好物であるがやはりカレーライスが好きだった。当時はライスカレーと呼んでいた。ハイカラな食べ物のイメージであった。それと並んで好物だったのが“お茶漬けごはん”である。新鮮な生魚に醤油、ごまをご飯にかけお茶を注ぐ式のかんたんなものだがとても美味しかったのを覚えている。大人になって魚の刺身はあまり好きでないのは“お茶漬けごはん”が好きだったのと同様だろうか？

子供のころの「おやつ」について、やはりこれも貧弱な物ばかりであった。さつまいも、とまと、おもち、キリコンモチ、ヒヤキ(メリケン粉と薄くとかして焼く)、ハツタイノ粉、じゃがいも、いもあめなどが・・・ひどいときは大根やなすび等を畑でとってそのまま食べていた。バナナなど食べたくても年に1～2回食べれたら良い方だった。これと同じように貴重な食べ物が卵(にわとり)であった。病気のときに口にすくらいで減多に食べなかった。盆・正月の時さえ。小さい頃から ばらずし は食べることが出来なかった(嫌い)。よく育った物だと思う、感謝・感謝である！

3. 毎朝、金光教の教会に連れて行かれた

うちの宗教は仏教と金光教である。仏教は浄土真宗。いま三木の仏壇もそう。子供の頃は仏教のことは殆ど知らなかった。時々西念寺(今は西光寺)のお坊さんが月参りに来てくれていた。宗派のことは知らなかった。父や母が亡くなってお寺さんに頼むときに初めて知ったくらいだ。それと矢田家の墓を別府から三木に移す時、作法、しきたり、お経など・・・浄土真宗の方式にのっとってした。

小学校2～3年の頃毎朝6時前に起こされて、朝食の時間までに父と和子姉さん3人で約1km離れた金光教鉄輪教会にお参りに行っていた。ねむたいのに、寒いのに、生きたくないのに 仕方なく連れて行かれた。お参りの口上、念仏(?)を知っているわけでもなく、きまり文句(書き物、掲示しているもの)を唱えていた。そして田村先生(と呼んでいた)のお話を聞いて帰った。30～40分教会にいた。時々別府の本教会にも連れて行かれることもあった。そんなことで今でも尼崎、神戸などで金光教会を見かけると親近感を感じる。三木市の金光教会の場所や全国の総本家が岡山県金光市にあることも知っている。行ったことはないが。

4. 共同浴場

羽府市は日本一の温泉の町と言われる。中でも鉄輪の街では至る所から湯気や温泉が噴き出している。共同浴場もたくさんある。家の近くには熱の湯、元湯、洪の湯、筋湯、大師湯、地獄原温泉がある。毎日熱の湯か筋湯に行っていた。家族で行ったり、友達で行ったり、一人で行くこともあった。熱の湯はうかり荘、西念寺のすぐ下、旅館大平屋（佐藤文生元運輸大臣）の玄関のまん前にあり、きれいな湯、明るい浴場で人気があった。筋湯は温泉のみで水を一滴もいれないので熱くて入れないこともあった。夜10時になると毎日地区当番の人が掃除をしていた。男湯がすんだら女湯の順に。子供たちは男湯・女湯は関係なくどちらにも入った。みなと屋、辰巳屋に近くには元湯と洪の湯があり、洪ノ湯には滝の湯や、蒸し湯があった。とても暗く、うす気味の悪いところであった。中学生の頃建て変わった。旅館や貸間には自前の浴場があるが湯治客は共同浴場を利用して地元の人と接するのを楽しんでいる人や、共同浴場をはしごする人も結構いたようだ。

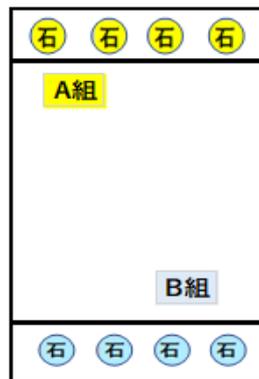
5. 母の食料買い出し

幼稚園に入る前の頃、1947年（S. 22年）くらいか、私が4才姉が7才と11才。食べ盛り、成長期といえる。終戦直後食糧事情は極めて厳しいものであったと聞いている。当時の親は子供たちに少しでも食べさせようと苦心し、知恵をしぼり、体を動かしていた。鉄輪東の畑で乏しい経験のなかで農家の人に教えてもらいながら野菜を作っていたのもその一つだ。肥料は主に人糞だったように思う。季節によっては米を求めて、山奥の湯山や塚原地区の方まで足を運び買い出しに行っていたようだ。片道5~6里（20~30km）はあったのではないだろうか。しかも帰りは重い米や栗の袋を抱えて、たぶん近所の主婦数人と一緒に行っていたようだ。今考えると本当にありがたい、頭が下がる、涙が出てくる思いだ。そんな記憶の中でも、ある時、帰りが大雨になったのであろう、体はびしょ濡れ、米や栗の袋は雨で重たくって・・・夜9時を過ぎて帰ってきたことを鮮明に覚えている。

6. 石けり(?)で遊んだ

1~8才くらいの頃、道路、道ばたでよく遊んだ。石けり(?)、Sケン、缶蹴り、センカン、パッチン、コマ回し、ビー玉、ピンコ、陣取り、かくれんぼ・・・ 2~3才の上の子、そして下の子も集まって、近所の子供たちがいっぱい。なかでも好きな遊びは石けり(?)遊びの名前忘れた)であった。10m×5mの四角、長手方向にA、B2組に分かれての対抗戦(各組3~4人)。

最初は自分の石を足の甲の上のせ落とさないように相手の陣地まで運び相手の石にぶっつける。当たらないと無得点、成功すると同じ格好でまた自陣まで戻る。途中で石を地面に落としてもダメ(無得点)。次は石を足のひざの裏側に挟んでトライする相手の石にぶっつける。その次々と次第に石の位置が体の上部に移動させる。腹の上、脇の下、肩の上、ホッペの上、頭のテッペンと上がっていく。A、B組交互に試行しチームの総得点で勝負を決める。子供ながら器用な子、不器用などんくさい子もいる。ラッキー、アンラッキーを含め結構面白い遊びだった。利用する石の形状は当然、平べったいのが取り扱いやすい。例えば瓦のかけらみたいなのが、自分の愛用の石があったように思う。



7. 遊び道具は子供自らが作った

終戦後お金はないし、食べ物も不足していた。種々調達してきて腹の足しにした。木の突や魚をとる道具、遊び道具も自分たちで作った。ポピュラーなものとして竹とんぼ、チャンバラの刀、ゴム銃、釣り竿、などがあげられる。これらに加えて弓と矢、竹馬、パットとボール、ヤス、パチンコゲーム、ローラスケート、鳥のわな、将棋の駒などは制作に難しい部類だ。これらは年長の人らと一緒に作り、その課程で教えてもらったり、覚えていく式だ。年下の子供たちにも順送りする。これらの作り方を今でもひとつひとつ殆ど覚えている、大したものだ。昔の子供は創意工夫に長けていたのか、「窮すれば通ず」というやつか。鳥のワナや弓矢の作り方は芸術的と言えるかも。飛ぶ凧を作るのもそう簡単ではなかった。工作用の道具として肥後守が大活躍したのもこの時代である。

8. 自転車の練習

子供の頃あこがれの乗り物に自転車がある。家に自転車があるところは減多になかった。裕福な家、兄弟が多いところ、にまれに自分とこに自家用の自転車があった。もしくは酒屋や八百屋など商売用のものもあった。そこの子らは小学校高学年になるとその自転車を遊びに使っていた。うらやましかった。あれに乗ってみたい、夢にまで出てくる。そんな思いであった。あるときそれを借りる機会に恵まれ喜び勇んで自転車の練習をしてみた。とてもじゃないがちょっとやそつと乗れる代物ではない。ギブアップした。それでも何日がするとまた余計に乗りたくなる。再度借りて足かけ乗り、三角乗りなど、すこしづつ上達していく。足に沢山のゲガをして親に叱られ続けてやっと乗れるようになった。嬉しかった。優越感もあった。自転車のことで別の思い出もある。他の友人が初心者の頃タクシーに正面衝突しことだ。タクシーもスピードをゆるめ進行していたので大事に至らなかったが、どちかという友人の自転車のほうがタクシーの正面にぶつかったといったほうがよさそうである。タクシーの方が被害者である。はじめのころはそんなことがよくある。

9. 川をせき止め魚をとった

子供が魚を獲るのは池でフナを釣るとか、川でドンコや沢ガニを獲るくらいが普通である。こんなことは何回となくやってきて飽きてきた。それでは不満足、ごそつといっぱいとれる方法はないか？考えたのが川をせき止めて、池を作り、そこに魚を誘い込んで網で一挙に獲ってしまおうという算段である。川をせき止めるには、川底を掘る、大小の石を並べて流れを変える、みずたまり、池を作る。これにはたいそうな時間と労力がある。友人3~4人で1~2時間くらいかかる。掘ったり、大小の石を積んだりで水の濁りで魚が見えない、入っているのやいないのやら？1~2日経ってからそこに来てみるみどり魚が集まっているか？・少しはいるものの期待通りにはいかない。苦労した割に少なかった。川や田圃をあらしてお百姓さんに怒られ逃げ回ることとなった。竹の筒をくりぬいて川底におきウナギを獲る方がかんたんな作業だ。この方法は湯山のキャンプ場で教えてもらった。

10. 大分交通、亀の井バス 木炭車の頃

自分が住んでいた鉄輪から別府市街へ行くバス、あるいは亀川方面へのバス、その当時は乗客も少なく1日数便くらいではなかったのではないだろうか。いずれのバスも背後に木炭を炊く釜とボイラーを積んでいた。蒸気で動かしていたのだろう。カバーなど無く外から丸見えの状態だった。結構大きなものだった。その分台座も大きく、子供たちがその台座に飛び乗って20m~30mくらいは乗っていた。思い出しても危ない遊びである。ただその当時のバスは馬力もなくそれほどスピードが出ていなかった。子供が飛び乗ったり、飛び降りたりできる速さだったのだ。明礬の連中(友達)も登下校の際バに飛び乗り、いつも運転手から叱られたと言っていたのを覚えている。

11. 温泉祭りの太鼓の練習

別府市では春4月恒例の温泉祭りが開催される。鉄輪でも地区ごとに神輿や山車が巡行する行事がある。大人も子供も、男も女も祭り衣装に化粧をして行列に参加する。当然カネ、太鼓、笛、おはやしがつきものだ。太鼓当番も毎年地区ごとに変わる。あるとき矢田の母屋がある東地区(当時は下組)に当番が当たっていた。練習を見に行ったら母屋の牛小屋が練習場になっていた。いとこや同級生の友達が太鼓をたたいていた。自分も何回かその稽古に参加した。まつりの出番はなかったが、その稽古のおかげで今でもその太鼓の曲が頭の中に残っているし、パチと手の動きが今でも出来そうな気がする。小学校2、3年の時だったと思う。